

# 日系ペルー人の子供たちと言語継承

建木千佳

## 要旨

日系ペルー人の出稼ぎは当初男性のみが対象で、長引く別居から離婚に至る家庭が増え、ペルーでは大きな社会問題となった。そこで、通信教育制度が作られる。しかし、日本生まれや日本滞在が長い子供たちは、母語が日本語にシフトしてしまい、なかなか日本語が上達しない親との会話に支障をきたすようになる。出稼ぎで来日した親はペルーへの帰国を希望し、その日のために子供たちにはスペイン語の継承を強く望むが、子供たちのモチベーションの低さ、困難な先生の確保、資金不足など負の要因があり、スペイン語教育の実施・継続は容易ではない。しかし、たとえ週1回のスペイン語教室でも、子供たちのスペイン語継承・ペルー人としてのアイデンティティ形成に役立っていることは、授業観察から確認できる。本稿では、この継承スペイン語教育をサポートしつつ、日本語とのバイリンガル教育を可能にする教育方法を探る。

キーワード：日系ペルー人 スペイン語教育 PEAD バイリンガル教育  
継承語

## 1. はじめに

1990年の「出入国管理および難民認定法」の改正以降、日本に住む南米出身の日系人が急増し、その滞在が長期・定住化するとともに、子供の教育は深刻な問題の1つとして顕著になってきた。なかなか日本の生活になじめず、いじめの対象になったり、不登校になったりする子もいれば、日本語での会話はできても学習面で大幅に遅れをとっている子、家計を助けるために15歳未満でもアルバイトをしている子もいる。また、日本生まれや、幼少の時に来日した日本育ちの子供の場合は、母語が現地語である日本語にシフトしてしまい、両親との会話に支障をきたすケースも少なくない。

外国人児童・生徒の言語教育では、彼らの親のことば（母語）と、日本語のバイリンガルを目指す必要がある。最近でこそ、外国人児童・生徒の母語教育の必要性が叫ばれるようになったが、縫部（1999:46）にあるように、母語教育を行う場所として学校内という意見が教師から出なかったという。それは、日常業務で大変な学校では、これ以上のことはできないという教師の正直な声であろう。また、外国人児童の母語教育に取り組んでいるという学校の内容も、「課外の週2~3

時間では、会話型のバイリンガルになれても、バイリテラルになるのが難しい。」  
(中島 1998:162)

日系ペルー人の親にとって日本滞在は出稼ぎのための一時的なものであり、いつになるかわからないが、ペルーへの帰国を強く望んでいる。その日のために子供には母語・母文化に誇りを持ってもらえるような、ペルー人としての教育の必要性を感じている。この思いを彼らは声を大にして行政に訴えることはない。第2次大戦時中に受けた排斥運動やセンドロ・ルミノソのテロ活動の影響もあり、彼らはできるだけ目立たぬように、日本人との間で揉め事のないようにと、日本人・日本社会に気を遣いながら生活している。それで、彼らは彼らのコミュニティー内でできることを考える。こうして生まれるのが継承スペイン語教育である。本稿では、バイリンガル能力育成のために、この継承スペイン語教育の実践例を記述する。そして、今後の継承語教育のあり方と日本語教育を合わせて考えたい。

## 2. 日系ペルー人の子供たちに対する教育

日本への出稼ぎが始まった当初は、子供の教育や日本でのプライバシーのない生活を考え、夫が単身で来日するのが一般的であったが、別居が長引くとともに離婚が増え、父親のいない子供が急増した。このような状況に憂慮した日系の大手3社が、1993年、通信教育 PEAD(Programa de Educación a Distancia)を立ち上げ、翌年から始まる。PEADは、ペルー教育省認可の唯一の通信教育で、ペルーに帰国したときに遅れることなく年齢相応の学年に編入できるよう、ペルーと同様の教育を日本で受けられるようにしたものである。

日本で日系ペルー人の子供たち向けに行われているスペイン語教育には、全日制、私塾、土曜教室の3つがある。全日制的ペルー人学校はペルーの学校と同じ科目を学習している。私塾のほとんどは託児目的で始まったスペイン語教室である。共稼ぎの両親には安心して子供たちを預けられる場所が必要で、さらにスペイン語も学べればというニーズから生まれた。土曜教室は、月曜日から金曜日までは日本の学校に通っている子供たちにスペイン語を学ばせたい、ラテンアメリカの文化に触れさせたいという親の希望に応える形で始まった。

## 3. 調査結果

筆者は、日系ペルー人の家族の協力を得て、2003年10月末から2004年12月まで、あるPEADの土曜教室の参与観察及びインタビュー調査を行った。

授業中の様子をビデオに録画し、会話分析の手法を用いて分析を加えた。すると、会話的にはスペイン語と日本語のバイリンガルである子供たちだが、読み書

き、文化の継承という点に問題があることがわかった。

以下に、子供たちと先生のやり取りを見ていくことにする。なお、論文中に記す協力者名はすべて仮名を使用する。

表 1：スペイン語教室の子供たちのプロフィール(2004/06 現在)

名前 (仮名)	性別	年齢	来日時の年齢	日本の学校	スペイン語 学習歴	PEAD の テキスト
キミエ	女	8 歳	5 歳	小 3	5 年	小 3
ケビン	男	8 歳	4 歳	小 2	4 年	小 3
マサル	男	7 歳	4 歳	小 2	4 年	小 2
キヨシ	男	6 歳	8 ヶ月	小 1	1 年	なし
カズオ	男	5 歳	2 歳	なし	3 年	小 1
ミレーナ	女	5 歳	1 歳 6 ヶ月	保育園	3 年半	幼稚園
メラニー	女	5 歳	1 歳 6 ヶ月	保育園	3 年半	幼稚園

### 3.1 名前と苗字

( ) は動作等の説明で、《 》は筆者による日本語訳である。

①		テストに名前を書くように言われてマサルは名前を書く。
001	先生	(マサルが書いているのを見て)¿Tu nombre cuál es?《あなたの名前はどれ?》
002	マサル	Yha《イハ》
003	先生	¿Tu nombre es Yha?《あなたの名前はイハ?》
004	マサル	Masaru.《マサル》
005	先生	Masaru es tu nombre. Yha Omura es tu apellido. Son tus apellidos.《マサルがあなたの名前です。イハ オオムラはあなたの苗字です。》

(2004/01/31)

スペイン語と日本語では、名前の書き方が違う。スペイン語では、父親の姓と母親の姓を用いるので、筆者の場合、Chika Tatsuki(父親の姓) Usuba(母親の姓)となる。マサルは小学校に通っており、苗字、名前の順で書くことに慣れている。小学校では、名札の着用にはじまり、全ての持ち物に記名が義務付けられているが、どれを見ても「いはまさる」と書かれている。「名前=いはまさる」とインプットされているマサルには、どれが自分の名前なのかわからなかったと考えられる。

### 3.2 日付

②		
010	マサル	Señorita, ¿es 2002?《先生, 今は 2002 年?》
011	キミエ	2004《2004 年》
012	マサル	Señorita, ¿es 2002?《先生, 今は 2002 年?》
013	先生	2004, Masaru. Estamos en el año 2004.《2004 年ですよ, マサル。2004 年です。》
014	キミエ	Ya le *** 《もう私が教えた。》
015	先生	Estamos en el día 31 de enero 2004.《2004 年 1 月 31 日です。》

(2004/01/31)

テスト用紙には日付を書く場所があり, スラッシュが 2 本書かれている。それを見て, マサルは日付を書く箇所だということは理解したが, 西暦がわからなかった。日本では日付を書くときに西暦を使うことは少ない。小学校で使用している連絡帳をはじめとした各ノートには日付を書く欄が設けられているが, 月と日にちしかない。

ケ빈は 1 ヶ月後に実施したスペイン語の会話テストで自分の誕生日を *cuatro de veinti seis* 《26 月 4 日》と答えた。日本語の 4 月 26 日の数字をそのままの順番でスペイン語読みした間違いである。日本語の場合は各月が数字で, 月, 日の順に言うし, 書くときも 1 月 31 日と月, 日の順で書く。略式でも 1/31 のように最初の数字が月で, スラッシュを挟んで日にちを書くが, スペイン語の場合は, 各月に数字とは関係ない名称がついている。書くときは名称を略して数字に置き換えることができ, 日にち, 月, 年の順で書く。数字は日本と同じだが, 1 ケタの数字の場合は十の位に 0 と書くので, 2004 年 1 月 31 日の場合は 31/01/2004 のようになる。

3.1 と 3.2 では, スペイン語と日本語の違いに戸惑う様子が伺える。しかし, 非日系の先生は日本語がわからないので, なぜこのような間違いをするのか理解できない。結局, 子供たちの間違いを指摘するだけになってしまう。また, 小学校では逆にスペイン語の干渉がある。マサルは, 筆算の符号の位置が何度注意しても左右逆になってしまう。これはペルー式の計算方法なのだが, それを知らなかった担任の先生は, 何か先天的な問題があるのではとっていた。

### 3.3 単語の切れ目

③		
020	先生	Ahora, ¿qué dice acá?(指で文字を指す。)《じゃ, ここになんて書いてある?》

021	マサル	(先生が指している箇所を、たどたどしく読む。)Separa la las palabras correctamente.
022	先生	Lee, vas a separar como debe de ser acá.《読んで、正しく単語を切り離してここに書きます。》
023	マサル	Están bien, están bien.(先生の顔を見る。)《みんな正しいよ。みんな正しいよ。》
024	先生	Ningunas están bien. ¿Tú escribes así de corrido? No. Tú las tienes que separar y escribir palabra por palabra. ¿Ya?《1つも正しいものはありません。あなたはこうやって全部続けて書くの？違うでしょ。単語ごとに分けて書かなければなりません。わかった？》

(2004/01/31)

日本語の場合、通常分ち書きにはしないが、小学1年生の国語の本は分ち書きになっている。また、漢字やカタカナがあり、単語の切れ目は見つけやすい。しかし、スペイン語はすべてアルファベットで、書くときも筆記体でつなげて書く。単語ごとに切り離して書かなければならないが、知らない単語はどこが切れ目だかわからない。それで、ディクテーションのとき先生に¿separado?《離れてる?》と聞いて、単語の切れ目を確認しながら書いている。

ペルーでは、小学校に入ると、スペイン語の文法学習が始まり、1年生はディクテーションを繰り返しながら単語の切れ目を覚える。幼稚園までは全部つなげて話していたスペイン語も、1年生になって単語の切れ目を覚え、2年生では完全に単語の切れ目を習得し、間違えることはないと言う。(2005/01/30 ケビンの両親へのインタビュー回答)

マサルは PEAD の 1 年生のテキストを終えようとしているところで、時期的には単語の切れ目が習得できていていいはずなのだが、ケビンの母親は、「先生がプロではないので、ペルーと同じようにはいかない」と言う。先生の指導法も原因の 1 つにはなるだろうが、それよりも、学習時間が少ないことの方が大きい要因になると思われる。

2004 年 3 月、マサルとケビンがスペイン語の『鈴の兵隊』の絵本を音読したとき、彼らは指で文字を 1 つ 1 つ追いながらたどたどしく読んでいた。指で文字を追いながら読むのは、先生からそのように指導されているからであり、スラスラ読めないマサルとケビンはもちろんのこと、結構早く読めるキミエでさえも、指で文字を追うようにと言われている。

マサルとケビンは、指で文字を追いながら読んでいても、自分の都合に合わせてポーズを入れてしまうので、彼らの音読は聞いているだけでは内容がつかめない。また、指で文字を追っているはずなのに、同じ箇所を繰り返し読んでしまう

が、読んでいる本人は気づかない。

5月にケビンがキミエと1つの文章を半分ずつ読んだときは、分量はほぼ同量だったのに、ケビンが要した時間はキミエの3倍だった。しかし、夏休みを過ぎたころには、ケビンもマサルもテキストの文章がだいぶ速く読めるようになった。彼らのスペイン語の音読が時間とともに進歩していることは確認できたが、手放しで喜んではいられない。PEADの目的では、ペルーに帰ったとき、遅れることなく当該学年に編入できることもうたっている。3年生のテキストに進んだケビンが、まだ単語を正確に認知できないことにはいささか不安を覚えずにはいられない。同じ3年生のテキストをやっているキミエは単語の切り方を間違えることはないのに、ケビンは1時間のうちに3度も単語の切れ目を間違えていた。(2004/05/08 フィールドノート)

### 3.4 コンドルを知らない子供たち

⑤		
210	先生	(テキストを読む。)¿Qué más hay otros animales nativos? 《他に何が、他の土着の動物は何がある?》¿Propios del Perú?《ペルー固有のは?》
211	ケビン	Chimpance.《チンパンジー。》
212	先生	No.《いいえ、違います。》 La vi-cuña.《ビクーニャ。》 El cóndor.《コンドル。》
213	ケビン	¿Cóndor gallina.?《コンドル、ニワトリ?》
214	先生	El cui.《クイ。》(ケビンが先生に合わせてcuiと言う。)
215	ケビン	¿Qué cui?《クイは何?》
216	先生	La gallina la trajeron los españoles.《ニワトリは、スペイン人が持ってきたものです。》

(2004/03/06)

210で先生がケビンにペルー固有の動物を聞くと、211でチンパンジーと答える。それで、先生がビクーニャとコンドルをあげるが、ケビンの方はそれぞれどんな動物だかわからない。213ではコンドルのことをニワトリの仲間なのかと先生に問いかけるが、それに対する答えは216で、ケビンの質問の意図からずれたものになっている。先生は、213のgallina《ニワトリ》をケビンがペルー固有の動物として答えたと思い、216でニワトリはペルー固有のものではないと答えている。この会話のずれは、「ペルー人がコンドルのことを知らないはずがない」という大前提が先生にはあり、コンドルを「ニワトリのこと?」と聞くはずがないという一方的な思い込みから生じたと考えられる。

4歳になってまもなく来日して以来1度もペルーに帰っていないケビンにとっては、コンドルもクイもビクーニャもまったく知らない未知の動物である。タスクは、テキストにかかっている絵の中からペルー固有の動物を選ぶというものだ

ったが、211 のケビンの発話を見ると、彼が知っている動物はチンパンジーだったということがわかる。

タカモト家では、ミレーナとメラニーが通っていた保育園から絵本の購入案内が配布され、内容がよくわからなかった夫妻は、購入しなければならないのかと思ひ、初年度(2003年)だけ毎月1冊購読していた。この絵本を誰が読むかというところ、両親は仕事で忙しいし、ひらがなも上手に読めない。ミレーナとメラニーは当時まだひらがなが読めなかったため、2人への読み聞かせ役は兄のケビンだった。絵本はひらがなとカタカナで書かれているので、ケビンはスラスラ読むことができ、喜んで妹たちに絵本を読み聞かせていたようだ。

絵本にはよく動物が出てくる。オオカミ、キツネ、ライオン、ネズミと、インプ物語にも多くの動物が登場する。しかし、ペルーの動物は出てこない。PEADのテキストには、アマゾン川の伝説をはじめ、ペルーにゆかりのある話が載っているが、日本育ちの子供たちには距離があり、身近に感じられない。ところが、保育園や小学校で行われている本の読み聞かせや行事などから、日本の子供と同じように「一寸法師」や「かぐや姫」に触れていく。そして、ツルは知っているが、コンドルは知らないペルー人になっていく。

親が本の読み聞かせをしたり、自然や科学のことについて語ったりしていれば、語句の意味も察しがつき、理解は早まるが、まったく何もないところにゼロから築いていこうとすると、相当な時間と労力が必要になる。忙しい親の支援が期待できない子供たちにとっては、小学校での授業も、スペイン語教室での勉強も、ゼロからのスタートで、小さい頭の中にはたくさんの単語が次々にインプットされるが、なかなか理解には至らない。

言語が何であれ、子供たちに必要なのは、「知りたい」という興味・好奇心である。それを引き出すためには、実生活に近いものを題材とすることが望ましい。カナダの小学校で日本語教育に取り組んでいるエイコ・ラーセン氏は、小学生の場合、彼らの生活場面に密着したものでなければ理解できないので、アレンジを加えると言う。例えば、「浦島太郎」の劇にはカナダを代表する動物を加え、「かさ地蔵」では、村で売っているものに、実生活に密着しているものを取り入れるなどの工夫をすることで、子供だけでなく、大人たちの興味をもかきたて、日本語教育への理解、支持を得ている。(2004/07/01 財団法人国際文化フォーラム主催 小学生への日本語教育セミナー)子供たちが知識として得たものを確かめることができたり、利用することができれば、学習が机上の空論で終わることなく、達成感が得られ、さらなる興味へとつながっていく。このように子供たちを導くには経験豊富な教師が必要になる。

## 4. 難しいスペイン語継承

### 4.1 母親の精神的な負担

月曜日から金曜日までは日本の小学校に通っている子供たちは、土曜日もスペイン語の勉強をしに行かなければならない。先生が熱心になればなるほど宿題が出る。一週間に1回しかないのに、宿題の量は必然的に多くなってしまふ。しかし、子供たちの周囲にスペイン語の読み書きの必要性を示唆する環境はなく、母親に座らされて、怒られながら宿題をする。ケビンの母親のルミは「3人の子供を座らせてスペイン語の宿題をやらせると、自分のほうがヒステリーになってしまう」と言う。もう1人の母親モニカは、嫌がるキヨシを無理やり座らせ、喧嘩したり、泣き出す息子をなだめたりしながらやっとの思いで宿題をやらせる。

母親たちにとって子供がスペイン語を覚えてくれるのはこの上ない喜びである。特にモニカはスペイン語での会話が難しいキヨシがスペイン語を覚えてくれるのを心待ちにしていた。キヨシの部屋にはペルーの祖母から送られてきたスペイン語を覚えるための絵や表が何枚も貼ってある。ところが、土曜教室に来てから6ヶ月を過ぎたころ、とうとうモニカは我慢ができなくなり、キヨシのスペイン語をあきらめた。

モニカのように、嫌がる子供に無理やりスペイン語を学ばせることに耐えられなくなってしまう母親は少なくない。ただでさえ多忙な毎日に、ペルーとは勝手の違う小学校や保育園の要求に四苦八苦して応えたと思ったら、休む間もなくスペイン語の宿題に取りかからなければ、土曜日のクラスに間に合わない。間に合わなければ、先生から小言を言われるのは母親である。こうして、子供にスペイン語を学ばせることで母親のストレスは増大し、スペイン語を学んでほしいと思いつつもあきらめてしまうのである。

### 4.2. 家庭の経済的負担

ケビンは現在小学3年生で、学習塾に通っている。双子の妹は1年生になった。彼らは2003年1月から始まったPEADの土曜教室に通っていた。月謝は1人1万5千円で、タカモト家では毎月スペイン語教育に4万5千円かかっていた。この教室は、先生がペルーへ帰国したため2年で閉鎖に至った。

日本の小中学校は義務教育だが諸雑費がいろいろかかる。毎月の積み立てが4~5千円。双子の妹のランドセル、体操服、割烹着（給食用）、上履き、副教材、そして指定されているノートと出費は尽きない。母親がパートで稼ぐ月8万円のほとんどは教育費に消えてしまうので生活に余裕はなく、国民健康保険の支払いもやめたいと言う。マサルの母親は、土曜日のスペイン語教室が開講されれば通わせると言っているが、ケビンの母親のルミは「マサルは1人だからいいけど、

うちは3人で、とても払えない。」と言う。

子供たちは日本の学校に通っているのですが、小学校ではプールの授業がある。水が怖くて泳げなかったケビンも、他の子に遅れをとらないようにと水泳教室に通わせ、ケビンが泳げるようになって楽しくなったところに、経済的な理由から水泳教室を止めさせる。学習のほうは、ケビンが1年生のときの漢字はルミもわかったが、2年生の漢字からお手上げ状態になり、担任の先生の勧めもあり、3年生になる前から学習塾に通わせている。

親は当然のことながら、子供にスペイン語教育を受けさせたいと思っている。しかし、正規の学校である小学校の学習が第一となり、そのための出費が年齢とともに多くなり、母語であるスペイン語の教育は、経済的にも大きな負担となる。

#### 4.3. 先生の確保

スペイン語教室には先生が必要だが、この先生の確保が非常に困難である。先生はスペイン語が話せる人なら誰でもいいというわけにはいかない。継承語教室の場合、クラス内の生徒の年齢とレベルが複数存在するのが普通で、先生は個別対応を強いられる。さらに、子供たちの多くは両親が多忙なため家庭でのしつけが不十分で、常に注意していなければならない。子供たちをコントロールするのは容易なことではない。

ところが、その仕事内容に見合う待遇は期待できない。全日制ペルー人学校を含め、各教室の教師への手当ては日本で生活していくのに十分なものではない。運営費は親が支払う月謝だけなので、生徒数の減少や月謝滞納は、即、教師の待遇に影響する。ペルーでは先生だったとしても、来日目的は出稼ぎなので、待遇のいい仕事が見つければそちらへ移ってしまう。家族呼び寄せで来日した場合でも、将来に何の希望も見えないスペイン語教室の待遇では先生を引き止めておけない。

筆者が参与観察を行ったスペイン語教室は2年続いたが、先生が突然ペルーに帰国すると言い出した。日本語もできなければ日本人の友達もいなかった彼女は、車の運転はするものの行動範囲は狭く、二言目にはペルーへ帰ると言っていた。そして、「このまま日本にいても今の生活(6畳2間のアパート暮らし)から抜け出せない」と、工場で働く夫を残して、2人の子供と3年滞在した日本を後にする。彼女の心残りはスペイン語教室に通ってきていた子供たちだったが、教室はその後夫が引き継ぎ、5ヶ月は続けた。しかし、子供たちと離れての生活に耐えられなくなった夫も帰国した。

こうして、子供たちのスペイン語教室は消滅し、スペイン語学習は、各家庭でPEADのテキストを進めることになるが、すでに述べたように、子供たちは自力

でテキストの学習ができないし、親も忙しい。小学校の勉強もある。両親との会話はまだスペイン語で維持できるが、子供たち同士では日本語の使用が増えており、スペイン語喪失が懸念される。

## 5. おわりに

3 で見た子供たちは、ペルーよりも日本の生活の方が長くなってしまった。もう、ペルーの印象もなければ、ペルーへの帰国を希望することもない。子供たちは、友達のいる日本の方が、学校給食で食べ慣れた日本食の方がいいようだ。子供たちの好物はカレーで、好んで聞く歌も日本の歌、読む本も日本語の絵本であり、本棚に並んでいるスペイン語の絵本に自ら進んで手を伸ばすことはない。子供たちは、親から言われてペルー人であることを意識しているが、挨拶のキスも嫌がり、人前では母親のキスでさえ拒むようになった。7歳7ヶ月の時に3年ぶりにペルーへ一時帰国をしたマサルもペルーの食事が嫌だったと言う。

しかし、親は時間とガソリン代をかけてもペルーの食材を買いに行き、レンタルビデオでペルーのテレビ番組を見る。子供はどんどん日本に慣れていくが、親はペルーにすがって生きている。いつかわからないがペルーに帰国するその日のために、子供たちにも PEAD の勉強をさせるが、家庭では難しい。スペイン語教室へ通わせれば、週に1回しかないので宿題が多量に出され、結局家庭の負担となる。スペイン語教室があればいいが、先生の帰国、引越し等で教室が閉鎖になるところも少なくない。けれども、冒頭でも述べたように子供たちへの母語教育は、家族の絆・アイデンティティー形成を含む子供の成長に欠かせないものである。

群馬県太田市は教育特区申請を出し、市費負担でポルトガル語・日本語のバイリンガル教員を採用し、2005年4月からポルトガル語での学習サポートを始めた。このプロジェクトは日本語の早期習得を目指すものであり、現段階ではポルトガル語の学習計画はないが、近い将来子供たちの母語教育も実施してほしいものである。子供たちには親の文化が誇れるように育ててほしいし、日本人の子供たちもグローバル化を肌で感じてほしい。教師には子供たちを国際理解の実践へと導いてほしいものである。

日本で一番ペルー人の多い群馬県伊勢崎市には、現在全日制ペルー人学校が2校ある。このペルー人学校でも日本語の必要性を感じており、両校とも日本語学習を取り入れているが、時間的には圧倒的にスペイン語の方が多く、バイリンガルにはほど遠い。このペルー人学校と公立の小学校が協力してイマージョン教育を実施することはできないものだろうか。ペルー人の先生も市の職員として採用できれば雇用は安定するし、移動の多い出稼ぎ家庭も、公立校でスペイン語も日

本語も学べるとなれば、親が通勤時間の延長を我慢して、子供の教育のために居住を落ち着かせることも考えられる。公立の小学校には制約も多く、市の財政問題もあるので、簡単に実施はできないだろう。しかし、地域に点在する中小工場の労働力として外国人に期待をするなら、子供の教育の心配をせず仕事に精が出せるような環境の提供を行政は心がけるべきであろう。今後も増え続けると思われる外国人児童・生徒の言語教育を、今までの日本への適応教育から日本での共存・共生に向け、彼らの母文化・母語の継承も取り入れたバイリンガル・バイカルチュラルを目指すものへと変えていく必要があると考える。

### 参考文献

- 池上重弘編著(2001)『ブラジル人と国際化する地域社会－居住・教育・医療－』明石書店
- NPO 大泉国際教育技術普及センター (2003)「外国人集住都市会議 in 豊田」(配布資料)
- カナダ日本語教育振興会(2000)『子供の会話力の見方と評価－バイリンガル会話テスト (OBC) の開発』凡人社
- 可児市国際交流協会 (2004)『外国人の子供の教育環境に関する実態調査報告書』
- 小内透編著(2003)『在日ブラジル人の教育と保育－群馬県太田・大泉地区を事例として－』明石書店
- コリン・ベーカー(岡秀夫訳)(1996)『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- (財) 国際日本語普及協会 (2002)『AJALT』 No.26 pp.22-28
- 佐々木倫子(2003)「加算的バイリンガル教育に向けて－継承日本語教育を中心に－」『桜美林シナジー』創刊号桜美林シナジー編集委員会 pp.23-38
- 志水宏吉・清水睦美編著 (2001)『ニューカマーと教育－学校文化とエスニシティの葛藤を巡って』明石書店
- 関口知子(2003)『在日日系ブラジル人の子どもたち－異文化間に育つ子供のアイデンティティ形成』明石書店
- 高橋幸春(1997)『日系人 その移民の歴史』三一書房
- 中島和子(1998 初版)『バイリンガル教育の方法－12歳までに親と教師ができること』アルク
- 中島和子(2001)「子供を対象とした活用法」『ACTFL OPI 入門』アルク pp.152-169
- 縫部義憲(1999)『入国児童のための日本語教育』スリーネットワーク
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 増田義郎・柳田利夫(1999)『ペルー太平洋とアンデスの国』中央公論新社

泉子・K・メイナード(1992 初版)『会話分析』くろしお出版

柳田利夫・義井豊(1999)『ペルー日系人の 20 世紀－100 人生 100 の肖像』芙蓉書房出版

#### 参考サイト

太田市 official site(2005/06/11 現在)「定住化に向けた外国人児童・生徒の教育特区構想」

<http://www.city.ota.gunma.jp/gyosei/0020a/001/04/gaikokujintop.htm>

法務省入国管理局(2004/07/20 現在)「平成 15 年末現在における外国人登録者統計について」 <http://www.moj.go.jp/PRESS/040611-1/040611-1.html>

Escuela Hispano Yokohama ホームページ (2004/07/20 現在)

<http://www.geocities.com/hermosavida/>

Mundo de Alegría ホームページ(2005/06/15 現在)

<http://www.mundodealegria.org/>